

★学校教育目標	多様な個性を尊重し、一人一人が輝く児童の育成	★重点計画の概要	
★目指す学校像（ビジョン）		「みどりプロジェクト～探究と“ホンモノ”の学び」 学年学級の中での親和性の高い人間関係を基盤に、様々なことに対し意欲的に挑戦できる学校をつくる	
【目指す児童・生徒像】	◎やさしい子 ○かしこい子 ○たくましい子		
【目指す学校像】	個性を発揮し合い子供が主役の楽しい学校		
【目指す教師像】	○すべての“いのち”を守り、育む教師 ○子供一人一人を大切にしたい親和性の高い温かい学級をつくる教師（特別活動の充		

領域	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策	評価指標・評価基準				学校評議員・学校運営協議会の意見	結果の分析と改善策
				評価点	取組指標	評価点	成果指標		
みんなが当事者として、自ら歩む道をつくる	一人一人を大切にしたい多様な学びの実現	児童自らが自分に合った学び方を選択し、多様な個と考えを創造したり、日常の事象や授業で学んだこと等から課題を見付け、探究的な学びを実践する。	①各学年・学級で単元全体もしくは1時間の授業で育みたい資質・能力に合った児童主体の多様な学びを実践する。	4	「児童主体の多様な学びを実践できた。」と回答した教員が85%以上	4	「自分で学び方を選択して学ぶことが正しい。」と回答した児童が85%以上	学校公開で授業を拜見し、一方通行ではないスタイルが定着していると感じた。「自分で学び方を選んで学ぶことが楽しい」の回答が90%を超えているのは良い。児童主体の学びが実践できていること、自ら課題を見付けて取り組もうとする姿勢が育っている。ただ、どの子たちも楽しく学び続けられるためには、どうすれば良いか、考え続けていただきたい。	自分で学び方を選択することが苦手な児童には、教師が学び方をいくつか提示したり、単元ごとにおすすめの学び方を伝えたりしながら選択できる安心感を与えていく。その安心感の中で、自らにあった学び方を選択し、楽しく学び続けられるように教師が適切なタイミングで介入していく。さらに親和性の高い学年学級集団の中で学びを進めていけるようにする。
				3	「児童主体の多様な学びを実践できた。」と回答した教員が80%以上	3	「自分で学び方を選択して学ぶことが正しい。」と回答した児童が80%以上		
みんなが多様な学びとあわせをつくる	すべての“いのち”が輝き、よろこびあふれる未来をひらく教育の推進	児童の心身の状況把握に努めるために学校生活アンケートを定期的実施し、児童が学校生活を楽しく安心して、過ごせるようにする。	②情報メディアセンター「みどりルーム」において、一人1台端末と図書を有効的に活用し、自ら設定した探究課題を解決する力を育む。さらに読み聞かせや読書ルーム・情報活用センターとして活用し、読書活動の充実を図り豊かな情操を育む。	4	「児童の探究的な学びを実践した」と回答した教員が80%以上	4	「自分の知りたことを本やインターネットを活用して調べながら学ぶことが楽しい」と回答した児童が80%以上	みどりルームというハードウェアの活用が進み、今後は子供たちの発想を取り入れたデザインやソフトウェアが進化することを期待する。そのためにも児童を意識した環境整備や、利用方法の検討をさらに行ってもよいのではないかと。	みどりルーム活用の意識付けはできたことを踏まえ、今後はより探究学習を中心に情報センターとしての役割を果たしていけるようにする。また、学ぶことに意欲をもたない児童のための学習漫画の導入や、児童主体のコーナー作りなど、子供たちの発想を募り、自分たちでみどりルームをアップデートさせていくことで、誰もが居心地よく主体的に学べる場への発展を目指す。
				3	「児童の探究的な学びを実践した」と回答した教員が70%以上	3	「自分の知りたことを本やインターネットを活用して調べながら学ぶことが楽しい」と回答した児童が70%以上		
みんなの多様な学びとあわせをつくる	すべての“いのち”が輝き、よろこびあふれる未来をひらく教育の推進	児童の心身の状況把握に努めるために学校生活アンケートを定期的実施し、児童が学校生活を楽しく安心して、過ごせるようにする。	③日頃から児童の変化を察知するとともに、学校生活アンケートを年3回実施し、いじめの未然防止、早期発見を図る等「いじめ見逃しゼロ」を目指す。いじめが発生した場合は、学校いじめ防止基本方針に従って、いじめ対策委員会を中心に、迅速かつ的確に組織的対応・解決を図る。	4	日頃からいじめ見逃しゼロに取り組み、学校生活アンケートをもとに児童との相談を行った教員が85%以上。	4	学校生活アンケートで、「困ったときなどに先生やまわりの大人に相談できた。」と回答した児童が85%以上。	児童の成果指標が低く、アンケートでの質問文を工夫して、原因をより深く探っているようにする。年間2回のアンケートだけではなく、日頃の子供たちの言動に注意をしていただきたい。また、子供は困った時に、周りの大人に相談することが苦手との傾向が見られる。大人は、子供の発するSOSに気付いてあげることが必要である。	本校の大きな課題である。児童からの相談しやすい環境にしておくために休み時間等の時間を利用して大人との関わり合いの機会を増やす。また、児童一人一人の様子をしっかりと観察することで、自分から相談や訴えることができるようにし、児童の悩みやニーズを引き出す対話を大切にしておく。
				3	日頃からいじめ見逃しゼロに取り組み、学校生活アンケートをもとに児童との相談を行った教員が80%以上。	3	学校生活アンケートで、「困ったときなどに先生やまわりの大人に相談できた。」と回答した児童が80%以上。		
社会と未来に関き、みんなてつくる	地域をステージとする学びの充実と幼保小中・特別支援学校との持続可能なつながりによる一貫した教育活動の充実	地域をステージとする学びを充実させ、幼稚園・保育園、近隣の小中学校、七生特別支援学校とともに地域共生社会を築くべく、各園・学校とのつながりを重視したによる教育を展開する。	④「学習指導要領における「特別活動 学級活動（1）」を中心に教員は研鑽を重ね、全学級で学級会を実践する中で、児童が安心感をもって自分の考えを伝えたり、相手の考えを受け入れたりする合意形成力、“折り合い力”を高め、様々なことに挑戦できる基盤となる親和性の高い人間関係形成力を育む。	4	学級活動（1）を通じ、「様々なことに挑戦できる基盤となる親和性の高い人間関係形成力を育むことができた。」と回答した教員が85%以上。	4	学年や学級の中で「自分の考えを安心して発信し、友達と考えを深めることができた。」と回答した児童が85%以上。	児童が安心感をもって自分の考えを伝えたり、相手の考えを受け入れたりするようになる場面は、「学級会」だけで成立する場合は疑問である。気軽な雑談のような場を繰り返し設定した方が良いのでは。子供たち同士の「ホンのふつけ合い」を、その後の関係に引きずらないような形で、いかに行うのかが大切である。	校内研究で「学級会」に取り組んだことで、自分の考えを表現したり、友達の考えを受け入れたりすることができるようになってきた。今後は、異なる意見について安易に妥協することなく、粘り強く検討したり、より多くの人の意見を反映させたりするためにどうすればいいかを、対話や議論をとおして深められる機会を各教科等や日常生活の中で実践していく。
				3	学級活動（1）を通じ、「様々なことに挑戦できる基盤となる親和性の高い人間関係形成力を育むことができた。」と回答した教員が80%以上。	3	学年や学級の中で「自分の考えを安心して発信し、友達と考えを深めることができた。」と回答した児童が80%以上。		
社会と未来に関き、みんなてつくる	“ホンモノ”の学びの推進	児童一人一人が、様々な“ホンモノ”に触れる経験をおとし、自ら「新しいことにチャレンジしてみよう」という気持ちをもてるようにする。	⑤近隣の幼稚園・保育園や小中学校、七生特別支援学校、あしながレインボーハウス等との交流をおとし、共生社会の一員として自分も相手も大切にしたいという多様な個を尊重する心を育成する。	4	「地域の多様な人材を活用した授業を行い、多様な個性を尊重し合える関係づくりができた。」と回答した教員が85%以上。	4	「地域のひととの交流をおとし自分も相手も大切し、多様な個性を尊重していきたい。」と回答した児童が85%以上。	近隣の施設との交流は大切なことであり、その貴重な機会を、一度限りのものとせず、どうやって継続していけるか、一緒に考えていきたい。七生緑小は、近隣の教育機関との交流がよくできていて、素晴らしい。今後も幼稚園、保育園、小中学校、特別支援学校との交流を続けてほしい。	近隣の幼稚園・保育園、特別支援学校、中学校との交流や、あしながレインボーハウスの外国人との交流を通して、多様性を認め合うことの大切さを実感できた。さらに交流を深め、よりよいものにするために実施時期や方法、回数を見直し、改善しながら継続していく。
				3	「地域の多様な人材を活用した授業を行い、多様な個性を尊重し合える関係づくりができた。」と回答した教員が80%以上。	3	「地域のひととの交流をおとし自分も相手も大切し、多様な個性を尊重していきたい。」と回答した児童が80%以上。		
社会と未来に関き、みんなてつくる	“ホンモノ”の学びの推進	児童一人一人が、様々な“ホンモノ”に触れる経験をおとし、自ら「新しいことにチャレンジしてみよう」という気持ちをもてるようにする。	⑥地域の多様な人材である近隣の大学の学生から“ホンモノ”の知識・技能を学ぶ中で、生涯に渡って学びに向かう態度を育成する。	4	「地域の教育資源を活用し、児童が生涯に渡って学び続ける機会を年に1回以上作った。」と回答した教員が90%以上。	4	「“ホンモノ”に触れ、新しいことに挑戦してみようかなと思えた。」と回答した児童が90%以上。	“ホンモノ”に触れる体験は、ぜひ進めていただきたい。ただ、その方策が地域の人材の大学生となっており、限界はある。幅広い“ホンモノ”に触れ、“ホンモノ”と触れることを、一度限りのものとせず、いかに継続していけるか。一緒に考えていきたい。それと同時にこれまでの地域の教育資源も大いに活用してほしい。	野球選手、アニメーター、助産師等、多様なゲストティーチャーを招いての授業を実施する中で、児童は新たな気付きや、感動を得られた。今後も、地域の教育資源を大切にしながらも、その裾野を広げ、多様な“ホンモノ”との出会いを実践していく。
				3	「地域の教育資源を活用し、児童が生涯に渡って学び続ける機会を年に1回以上作った。」と回答した教員が80%以上。	3	「“ホンモノ”に触れ、新しいことに挑戦してみようかなと思えた。」と回答した児童が80%以上。		
社会と未来に関き、みんなてつくる	“ホンモノ”の学びの推進	児童一人一人が、様々な“ホンモノ”に触れる経験をおとし、自ら「新しいことにチャレンジしてみよう」という気持ちをもてるようにする。	⑥地域の多様な人材である近隣の大学の学生から“ホンモノ”の知識・技能を学ぶ中で、生涯に渡って学びに向かう態度を育成する。	2	地域の教育資源を活用し、児童が生涯に渡って学び続ける機会を年に1回以上作った。」と回答した教員が75%以上。	2	「“ホンモノ”に触れ、新しいことに挑戦してみようかなと思えた。」と回答した児童が75%以上。		
				1	地域の教育資源を活用し、児童が生涯に渡って学び続ける機会を年に1回以上作った。」と回答した教員が75%未満。	1	「“ホンモノ”に触れ、新しいことに挑戦してみようかなと思えた。」と回答した児童が75%未満。		

※評価指標・評価基準は、2の段階を現状としています。